



TITLE:

京大広報 No. 193

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 193. 京大広報 1980, 193: 1097-1100

ISSUE DATE:

1980-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209493>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 193

京都大学広報委員会



昭和55年度本学入学試験おわる（3月5日） —関連記事本文2ページ—

## 目次

昭和55年度入学者選抜学力試験

（第2次学力検査）の実施……………2

国際学術交流に関する調査……………2

医療技術短期大学部の入学試験の実施……………2

＜紹介＞

理学部・火山研究施設……………3

訃報・日誌……………4

## ＜大学の動き＞

昭和55年度入学者選抜学力試験  
(第2次学力検査)の実施

昭和55年度第2次学力検査は、京大広報 No.191に掲載した実施計画のとおり3月4日(火)、5日(水)の両日にわたって実施された。受験状況は次のとおりである。

学 部	募集人員	志願者	受験者	欠席率
文 学 部	200人	597人	578人	3.2%
教 育 学 部	50	148	143	3.4
法 学 部	330	794	781	1.6
経 済 学 部	200	534	528	1.1
理 学 部	281	862	845	2.0
医 学 部	120	256	250	2.3
薬 学 部	80	150	147	2.0
工 学 部	945	1,979	1,945	1.7
農 学 部	300	425	416	2.1
計	2,506	5,745	5,633	1.9

(注) 1. 「志願者」のうち、法・経・理・医学部は第1段階選抜合格者の数である。  
2. 「受験者」と「欠席率」は、文・教育・法・経済学部については2日目の外国語、それ以外の学部については2日目の理科におけるものである。

合格者の発表は、3月18日(火)の午後、学部ごとに行なわれる予定である。

なお、このたびの学力検査の実施にあたりとら

れた措置は次のとおりである。

3月3日、総長は次の掲示を出した。

(掲示第3号)

入学試験を円滑に実施するため、3月4日(火)から3月5日(水)午後5時までの間、本学関係者並びに受験生以外の方の入構を禁止します。

昭和55年3月3日

京都大学総長 沢田 敏男

(掲示第4号)

3月4日から5日までの間入学試験実施のため、とくに学内における次の行為を禁じます。

1. 集会を開くこと
2. マイクを用いて静穏を害すること
3. デモを行うこと
4. その他入学試験を妨害する一切の行為

昭和55年3月3日

京都大学総長 沢田 敏男

## 国際学術交流に関する調査

国際交流委員会は、本学における海外研究機関との学術交流の実情を把握するため、委員長から3月6日付の文書で各部局長あてに調査を依頼した。

この調査は、大別すると次の3項目からなっている。(1)国際学術交流の現状、(2)今後の計画、(3)本学または部局等における国際学術交流に関する意見、提言。なお、回答期限は3月31日(月)であり、調査の結果は、委員会として本学における国際学術交流の今後のあり方を検討するさいの資料として使われる予定である。

(国際交流委員会委員長 河野健二)

## 医療技術短期大学部の入学試験の実施

医療技術短期大学部では、3月4日(火)、5日(水)の両日にわたって昭和55年度の入学試験

を実施した。実施状況は、下表のとおりである。

なお、合格者の発表は、3月17日(月)の午後行なわれる予定である。

学 科・専 攻 科	募集人員	志願者	受験者	倍 率	試 験 期 日	教 科	試 験 場
看 護 学 科 (3 年 制)	80人	(73)人 99	(66)人 86	1.1倍	3月4日(火) 〃 5日(水)	数学, 外国語, 国語 理科	京都女子大学
衛 生 技 術 学 科 (3 年 制)	40	(34) 172	(32) 151	3.8	3月4日(火) 〃 5日(水)	数学, 外国語, 国語 理科	〃
専 攻 科 助 産 学 特 別 専 攻 (1年制)	20	35	28	1.4	3月5日(水)	看護学, 外国語	〃

(注) 志願者数および受験者数欄の上段( )内は第二志望の志願者および受験者の数(外数)を示す。

(医療技術短期大学部)



## &lt;紹 介&gt;

## 理学部・火山研究施設

京都大学理学部火山研究施設は、設立以来50年の歳月を経過している。設立の経緯は、初代所長志田 順教授が大正15年(1926年)、著名な火山学者であるフランスの Alfred-Lacroix およびアメリカの A. L. Day から、阿蘇火山に研究所を設立するよう勧奨を受けたことに始まる。昭和2年(1927年)国費および熊本県の援助によって、火山研究所本館の起工をした。翌年3月の完成と同時に研究が開始され、火山爆発機構の地球物理学的研究を目指して、地震計が設置された。

昭和12年(1937年)、別府の地球物理学研究所との合併を機に、火山温泉研究所阿蘇研究所と改称されたが、昭和34年(1959年)3月に理学部附属火山研究施設が設置され、施設定員が増し、呼称は火山研究施設となった。なお、別府の地球物理学研究所(昭和12年、火山温泉研究所別府研究所と改称)は、火山研究施設の設置と同時に分離し、理学部附属地球物理学研究施設となっている。

近年、火山活動による災害を防除するため、よりの確な火山噴火予知の研究を推進することが国家的要請となってきた。このような主旨にもとづき、測地学審議会の建議が出され、昭和49年度から火山噴火予知計画が事業として始まった。本研究施設においても、火山噴火予知の研究は設立当初からの主研究題目であるので、この計画に積極的に参加し、観測点の充実・増強、観測の多様化、観測・解析装置の近代化が計られつつある。

火山の噴火現象は、地下の高温物質が地表に噴出する現象であって、地球全体の活動と決して無縁のものではない。本研究施設では、固体地球物理学の研究対象として、火山現象をとりあげ、火山の本性を解明すると共に、固体地球の性状を明らかにすることを目指している。内容を大別する

と、

(1)火山活動に伴う諸種の地球物理学的変動、例えば地震活動・地殻変動・地磁気・重力・地熱の変化等をとらえて、火山活動の様相を解明する。この研究は火山噴火予知の方法を探る基礎研究ともなっている。

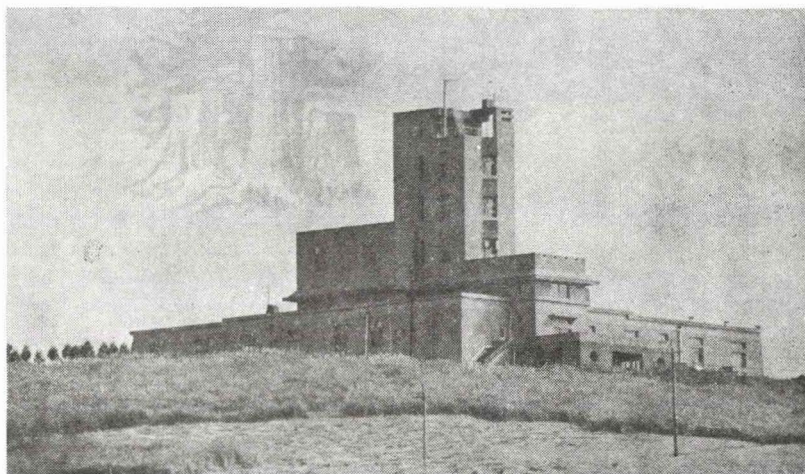
(2)火山体の構造を諸種の方法(地震波・重力・地磁気)を用いて解明する。

(3)火山活動は岩しょうの生成・上昇・噴火のすべての過程をたどるものであり、その根源は、地球上部マントルにあると考えられており、火山現象を介して地球内部の性状を探る問題も研究対象としている。

主要な建物である火山研究所本館(写真)は活動中の中岳火口の西方約7kmの標高560mの丘の上にあって延面積1,436m<sup>2</sup>で、内部には、諸種の地震計・中岳周辺にある10点の観測室から、12GHz<sub>2</sub>のマイクロ波により送られて来る地震や地殻変動の信号のテレメータ受信設備・データ集録解析設備・地球電磁気観測設備・重力計などが備えられ、連続観測が行なわれている。

また当研究施設は、本館のほか阿蘇町内牧の内牧支所、中岳火口周辺の本堂・砂千里・大平各観測所、同山腹の草千里観測所からなり、学部学生、大学院学生等の研究実習の施設としても利用され、教官は理学部において火山物理学に関する講義等を担当している。

(理学部・火山研究施設)



理学部・火山研究施設本館(熊本県阿蘇郡長陽村)

## 訃 報

天野 貞祐（本学名誉教授・文学博士）

3月6日逝去，95歳。本学文科大学卒。昭和6年本学

文学部教授就任，同19年退官。その間評議員（昭和12年および同14年～16年），学生主事・学生課長（昭和12年～14年）を歴任。文部大臣（昭和25年～27年）。昭和32年から自由学園理事長，昭和45年から独協学園長。昭和48年勲一等旭日大綬章受章。専門は哲学。

## 日 誌

（1980年2月1日～2月29日）

2月5日 評議会

〃 防災研究所研究発表講演会（6日まで）

〃 タイ国 Silpakorn 大学 副学長 Chetana Nagavajara 氏外6名来学，総長および関係教官と懇談

6日 大韓民国 慶北大学 総長 徐 燦 珏氏来学，本学との学術交流に関する覚え書きに調印（7日まで）

13日 中華人民共和国中国科学院科学代表団 団長（同科学院副秘書長）張 文 松氏外8名来学，総長および関係教官と懇談

19日 評議会

〃 発明審議委員会

19日 ドイツ 民主 共和国 Humboldt-Universität zu Berlin 学長 Helmut Klein 氏および同大学国際局長 Johannes Klinkert 氏来学，総長と懇談

20日 国際交流委員会

23日 連合王国教育科学省 国際局長 John Banks 氏および同省視学官 Pauline Perry 氏来学，関係教官と懇談

〃 アメリカ合衆国エネルギー省開発技術部核融合室長 Franklin E. Coffman 氏来学，ヘリオトロン核融合研究センター施設見学

26日 組換え DNA 実験安全委員会

